聖徳太子（574 - 622）の直筆本：『法華義疏巻四』五百弟子授記品第八

①「その時、五百の羅漢」より以下は、第二に、記を得たる人の領解（りょうげ）を明かす。

また長行と偈（げ）有り。長行の中に就（つ）いて二有り。

② 第一に、法説を挙げて、略して領解す。

第二に、譬（たとえ）を挙げて、広く領解す。第一の法説は見るべし。

ただ第二の譬説（ひせつ）に就いて、即ち、開と合と有り。

③ 開譬（かいひ）の中に五つの譬（たとえ）有り。

第一に、名づけて、**繫珠（けしゅ）の譬**と為す。即ち、上（かみ）の化城（けじょう）の中の、第一の導師の譬を領す。

④ 第二に、「その人、酔い臥して、自（みずか）ら覚知せず」の二句は、名づけて、「自ら覚知せずの譬」と為す。

上の化城の中の、第二の懈退（けたい）の譬を領す。

⑤ 第三に、「起き已（おわ）りて遊行して」より以下は、名づけて、「他国に行くの譬」と為す。

上の「化城」の中の、第三の「化城を設（もう）くるの譬」を領す。

⑥ 第四に、「後に於（おい）て親友が」より以下は、名づけて、「親友相（あい）値（あ）うの譬」と為す。

上の「化城」の中の、第四の「止息を知るの譬」を領す。

⑦ 第五に、「而（しか）してこの言（ことば）を作（な）す」より以下は、名づけて、「宝珠を示すの譬」と為す。

上の「化城」の中の、第五の「将に宝所に至らんとすの譬」を領す。

⑧「譬えば人有りて…如し」とは、即ち、下根人自ら己れが身を譬う。

⑨「親友の家に至りて」とは、親友十六王子を譬え、家は三界を譬う。

言うこころは、聖人（しょうにん）は、化処（けしょ）を以て、家と為すなり。

⑩「酒に酔いて臥す」とは、五濁八苦を以て、為（ため）に惛（くら）むを譬う。

⑪「この時親友は官事にて行くに当りて」とは、化縁（けえん）既に尽きて、他方を化するに就くを譬う。

⑫「無賈（むげ）の宝珠を以て、於衣の裏に繫（つ）け、之（これ）を与えて去る」とは、大乗を無賈の宝珠に譬う。

⑬ 言うこころは、十六王［子］は、為に大乗を説き、後（のち）、他方を化するに就くなり。

⑭「衣の裏」とは、大乗の信を譬う。

而して、体信を亡壊（ぼうえ）すること能わざる故に、「衣の裏に繫け」と言う。

⑮ 問うて曰く、「若し、親友に家に至りて酔うと言わば、これ則ち、親友が酒を与えて酔わしむるなり。內合も、また然（しか）り。則ち、これ十六王子が衆生に五濁八苦を与えて惛（くら）ましむるや。」

⑯ 釈して曰く、「聖人云何（いかん）ぞ、煩悩の縁を作らん。ただこの文は、少し倒（さかさ）にして、応に『人有りて、酒に酔うて、親友の家に至りて臥す』と言うべし。」

⑰ 問うて曰く、「衆生と十六王子とは、皆三界を以て家と為す。則ち、この衆生は、何（いずこ）より来るが故に、『来り至る』と云うや。」

⑱ 答えて曰く、「王子と衆生とは、一家（いっけ）を共にすと雖（いえど）も、王子は既に化主（けしゅ）たり。自（おのずから）ら家主に当たる。

故に則ち衆生は、義として自ら来ると成す。故に親友の家に来り至ると云うなり。

若し、流れ来るの義を以てするも、また得（う）べし。」

⑲ また問う、「既に『衆生は、五濁八苦を以て為にその大機を障（さ）ゆ。故に、大乗を以て化を為すことを得ず』と云えり。則ち、義は、酒を以て、その正志を乱さるるが故に、珠を繫くるを為さざるが如し。

⑳ 而るに、若し、この文の如くならば、その酔える時に当ありて、而（しか）も繫く。

若し、しからば、五濁八苦を以て、惛（くら）まさるる時に当たって、為に大乗を説くや。」

㉑ 釈して曰く、五濁八苦は、若し、聖に登るに非ざれば、なんぞ絶無なることを得ん。

ただ或いは、動と不動との義有り。酒に酔うこと、或いは甚しく、或いは可なるが如し。

珠を繫くる時に当たりて、。酔うと雖も、なお可なり。

故に為に繫くることを得たり。內合するも、また然り。

衆生が五濁に動ぜざる時に、為に説くなり。

㉒ 一に云く、また可なり。珠を繫くる時に当たって、正しく、これ珠なりとの信無く、ただ物を繫くるとの信有り。これに因りて、為に繫くるなり。

內合するも、また然り。

㉓ 時に正しく大信無く、ただ楽欲（ぎょうよく）の信あり。これに因りて為に説くなり。

好しとせば、則ち、好し。

㉔ ただ上来説く所の「大機を発する故に、為に大乗を説く」の旨（むね）に違す。

㉕ 一に云く、また可なり。その酔う時に当たっては、すべて一信も無し。

而れども、なお為に繫くるは、後に利あるが為の故なり。

後に利すべき為とは、即ち、これ大乗の機を発するなり。

㉖ 即ち問う、若し、しからば、今日もまた応に信無かるべし。

然れば則ち、展転（てんてん）窮まり無し。何れの時にか信を成ぜん。

㉗ 釈して曰く、何ぞ、信を成ずること無からん。

或いは、一説に因りて信じ、或いは、二三説にて成ず。或いは無数を須（もち）いて成ず。

㉘ 衆生の神根、各（おのおの）異なり、解悟（げご）同じにあらず。

所以に聖人、機に随って、為に説くこと、また窮まり無きなり。

この家（け）は、未来の善を以て、教えを感ずるものなり。

㉙「この人酔い臥して、すべて覚知せず」とは、第二に、自ら知らざるの譬なり。

上の第二の懈退（けたい）の譬を領す。

㉚ 言うこころは、大機なき故に、大乗を以て化を為すを得ざるなり。

珠を繫くるの時に当たっては、酔うと雖も、なお可なり。

ただ酔うて臥すること久しき故に、忘れて知らざるなり。

㉛ 內合すれば、五濁八苦の起こり動くこと久しき故に、その大信を忘るるなり。

㉜「起き已りて遊行して」より以下は、第三に、他国に遊ぶの譬なり。

上の「化城」の中の、第三の化城を設くるを領す。

言うこころは、三乗を以て化するを得るなり。

㉝ 中に就いて二つあり。第一は、親友は酔いより起きて行くを見るの譬と名づく。

如来は、衆生が少（小）乗の機を発すを見る。

上の「化城」に、導師が衆の所楽（ねがい）を知ると云うを領す。

㉞ 第二に、「若し少しく」より以下は、「少を得て足れりと為すの譬」と名づく。

三乗の人、三乗を受けて、足れりと為す。

上の「化城」に、衆人（もろびと）が化城を受くと云えるを領す。

㉟「起き已りて遊行して」とは、言うこころは、酒いまだ醒めずと雖も、理として、非永く臥するにあらざる故に、起きて行くなり。

內合すれば、衆生は大機なしと雖も、理として非永く迷うにあらざる故に、また三乗の機を発（おこ）すなり。

㊱「他国に到る」とは、今その本の大乗の解（げ）を失いて、将（まさ）に三乗教の中に入らんとすること、他国に到るが如し。

㊲「衣食の為の故に、勤力（つとめて）、求索（もと）むること甚（はなは）だ大いに艱難（かんなん）せり」とは、二果を得んと欲するが為に、四諦及び十二因の義を勤修（ごんしゅ）するなり。

㊳ ここに至る以前は、上の「化城」に汝等（なんじら）愍（あわ）れむべし、云何（いかん）ぞ大珍宝を捨てて、退き還らんと欲する」と云えるを領す。

㊴「若し少しく得る所あれば、便ち以て足れりと為す」とは、二乗が少分を得て、足れりと為すことを明かす。即ち、上の「化城」に、「我等は今この悪道を免れて、已（すで）に度せりの想いを生じ、安穏の想いを生ず」と云えるを領す。

㊵「後に於て、親友が会い遇（お）うて之（これ）を見る」とは、第四に、「親友相（あい）値（あ）うの譬」と名づく。上の「化城」の、第四の「止息を知るの譬」を領す。

言うこころは、如来が、大機を発すを見るなり。

上には、「この諸の人衆（ひとびと）既に止息することを得て、復た疲倦（つかれ）なし」と云えり。

㊶「而してこの言（ことば）を作す」より以下は、第五に、名づけて、「珠を示すの譬」と為す。

上の「化城」の中の、第五の「将に宝所に至らんとする譬」を領す。

言うこころは、為に今日の法華を説くなり。上には、「即ち化城を滅して、衆人（ひとびと）に語りて言う、『汝等（なんじら）、去来（いざ）や、宝所は近きに在り。向者（さき）の大城は、我が化作（けさ）せし所なり』」と云えり。

㊷ 中に就いて、三つあり。第一に、「何ぞ、衣食の為に、乃ちかくの如くに至るや」とは、それ少を求むるを非す。即ち、領上に云「向者（さき）の大城は、我が化作せし所なり」と云えるを領す。

㊸ 第二に、「我昔」より以下は、それ本を忘るるを非し、為に正しく示す。

即ち、上の「汝等、去来（いざ）や、宝所は近きに在あり」を領す。

㊹ 第三に、「汝今」より以下、義を以て、今の一を修せよと勧むることを領す。

㊺「仏もまたかくの如し」より以下は、第二の合譬（ごうひ）なり。

従初（はじめ）より、「一切智の心を発さしむ」に訖るまで、第一の繫珠の譬に合す。

㊻「而るに、尋（つ）いで廃忘（はいもう）して、覚らず知らず」とは、第二の「自ら知らざる譬」に合す。

㊼「既に阿羅漢の道を得て」より以下は、第三の「他国に行くの譬」に合す。

㊽「一切智の願いはなお在りて失わず」とは、第四の「相（あい）値（あ）う譬」に合す。

㊾「今、世尊」より以下は、第五の「珠を示すの譬」に合す。

㊿「世尊よ、我今乃ち知れり」より以下は、懸（はる）かに、第六の「珠を得て歓喜するの譬」に合す。皆、見るべし。